



ヴァイオリン・レッスン・ルーム

巨匠の伝言

第62回



ミュートをつける
サラサーテ：ツィゴイネルワイゼン②

ヴァイオリニスト
日本フィルハーモニー交響楽団ソロ・コンサートマスター **木野 雅之**

URL : <http://www.masakino.com/>

ミュートをつける

ミュートは別名ソルディーノ、弱音器などと呼ばれている。多くの曲の中で、それぞれ多種多様に使われ、独特の音色を作り出し、曲に味わいをもたらす。そのミュート自体の種類は、私自身にも把握することのできないほど多い。

現代で使われている主たるものは、ゴム、プラスチック製で、オーケストラの曲に適すようヴァイオリンの駒のすぐ側に位置できるなど、利便性を考慮した形状になっている。

他にも、象牙、アルミ、鉄、木……、様々なミュートがあるが、個人的には革製の音色が好きである。多種多様なミュートの中でも木製や革製は昔からあった形であり、取り外しているときには譜面台や、ピアノの上に置かなければならないため、激しく使う近現代の作品には向かない。また、オケにも向かず、主にソロで演奏する時に活躍する。

ミュートをつける一番の理由は音を弱くして音色を変化させることである。その“弱さ”にも、

ミュートの種類、付け方によって多少の違いを出すことができる。例えば木製や革製で、三本足になっているものは、A線側を浅めにするとう音の高さによってもバランスを変えることができ、楽しい。つまり、ミュートとは、ただ音が弱くなれば良いというものではないということ。一つ一つに独特の音色があり、手作りになればなおさらその特徴は強くなる。即ち、曲によってつけるミュートを変えてみるのも手である。

注意しなくてはならないのは、その形状から自分の楽器、駒に合わず、雑音のするものが時としてある、ということ。できればつける前によく拭いて綺麗にし、また、何度かつけてはよく音を聞くようにすることが大切である。

また、弦の張力も著しく変わるため、調弦にも最新の注意を払うこと。つけていないときに調弦しても、つけた瞬間くるってしまうこともしばしばある。

このような点に気をつけて楽しい音楽をつくってください。

パブロ・デ・サラサーテ Pablo de Sarasate (1844~1908) スペイン
ツィゴイネルワイゼン Zigeunerweisen Op.20

19世紀のヴァイオリン・ヴィルトゥオーソのひとり。美しい音色と細かい技巧的演奏で知られ、欧米の他、中近東、南アフリカにも演奏旅行した。

ラロ、サン＝サーンス、ブルッフ等が彼に協奏曲を捧げている。

先月から取り上げている1878年の作「Zigeunerweisen Op.20」は、ジプシーの歌という意味のドイツ語であり、元はハンガリー・ジプシーの作風を土台に作られている。ただし、中間部の弱音器をつけた、ウン・ポコ・レントの部分は、ハンガリー・ジプシーの民謡「世界にただ一人の乙女」に基づいた美しいメロディである。